

食文化と心の成長 — 鍋料理から教育問題を考える —

大山とし子

要旨 鍋料理は子どものこころの成長に及ぼす家庭の食生活の影響を反映し、鍋料理への反応と人間関係構築力には相関関係があるのではないかと、また、それを通して現代社会が抱える問題の本質がみえるのではないかと考え「鍋料理と人間関係」の調査アンケートを実施した。

調査の結果、鍋料理が好きな者の人間関係は良好である事が確認された。しかしながら、精神的に自立できていないと推測できる親依存の傾向も表われており、各世代にわたって鍋を囲み、食を共にすることで得られる共感・一体感を求めていることが判明した。

キーワード：人間関係構築、家族、食育、食文化、鍋

1. はじめに

鍋料理には、家庭の団らんの象徴、コミュニケーションの料理¹⁾という一般的なイメージを日本人全体が持っており、更に、おなじ鍋をつつきあうことにより連帯感が生じる²⁾と考えられている。古代日本の祭事では山海の食物を神に捧げ、祭りの後それを集まった人々が食べ、直会(なおらい)の行事を行った。神と共食することで人々は神との交流を感じた³⁾。その祭事として現在に引き継がれているものの一つに正月の「おせち料理」がある。「おせち料理」は「御節供(おせちぐ)」の略でももとは年中行事が行われる節日の儀式に供える料理を指し、その中でも特に重要な正月の料理のことである。節日には神様にお供え物をし、自分たちも同じものをいただいて、豊かな実りや災難を避けることを祈願した⁴⁾。また、日常の生活においても毎朝神棚や仏壇にご飯やお茶を小さな容器に入れて供える風習があり、祖先との共食を毎日行っている家庭もある。「人間は共食する動物である」といわれ、共食の基本単位は家族である。食物の確保、分配と共食が家族の成立の基礎であり、連帯を維持するものであり、家庭とは食卓共同体であった。連帯は家族から集落に広がり、祭りの時は人々が集まって飲食することで連帯を確かめ合った。同じ釜の

飯を食べるということは人々に親密な意識を生み出すものである³⁾。これらの意義を現在に継承しているのが「鍋料理」であると考えられる。

2012年現在、子供の学ぶ意欲の低下や規範意識・自律心の低下、社会性の不足とりわけ人間関係を構築する力が弱く、相手を気遣うことや、人と協力して作業出来ない人間が増加する傾向にある。一方、いじめや不登校等の深刻な状況など学校教育が抱える課題が一層複雑化・多様化している。家庭においてもそれぞれの都合があって家族がそろって行動することが難しくなっている。また、家庭における食生活の変化に対し危機感が高まっている。このような中で、実際、我々は、人間不信と攻撃性を露わにしていた中学2年の生徒達は宿泊行事で鍋料理をつつかなかったという事象例に1994年に直面した経験を持っている。この事例から、鍋料理は子どものこころの成長に及ぼす家庭の食生活の影響を反映し、鍋料理への反応と人間関係構築力には相関関係があるのではないかと、また、それを通して現代社会が抱える問題の本質がみえるのではないかと考え、「鍋料理と人間関係」の調査アンケートを実施した。

2. 調査の方法

「鍋料理と人間関係」に関するアンケート調査は、大阪府内の公立小・中学生(8-14歳、N=356)、府立高校生(15-18歳、N=399)、大学生・大学院生(18-47

歳、N=97)、社会人(N=186)の日常生活活動を行っている男女の協力を得て1038名を対象に実施してきた。次節に示す内容の別アンケート用紙を用いて、本人同意のもとに書面調査を行った。2011年より2012年にかけて、小学生については保護者の同意の許に調査した。中学生・高校生に対しては教員が一斉調査を実施した。大学生・大学院生及び社会人に対しては著者自身が調査を行った。

解析にあたっては、1次集計の後にクロス集計を実施し、カイ自乗検定において有意差のあったもの(P<0.05)を採用した。

2-1 鍋料理と人間関係に関するアンケート調査

次の問いについて該当する項目があればその前の□にレ印を記入してください。なお、該当項目に○印をつけていただくところもあります。

1. 他人と話し合って協力し、うまく仕事(作業)ができますか。 □①はい □②いいえ
2. 幼児期にごっこ遊び(ままごとやヒーローごっこ)をしましたか。 □①はい □②いいえ
3. けんかやトラブルがあったときはどうしましたか。仲直りは気を遣わないでできましたか？
□①非常に気を遣った □②まずまずうまくいった □③うまくいかなかった
4. 小学校低学年のときに同性の友達と遊びましたか。
□①よく遊んだ □②ふつう □③遊べなかった
5. 子供の頃から現在まで、人とのルール作り(友達づきあいを含む)が得意ですか。
□①はい □②いいえ
6. グループで鍋料理を食べるのは好きですか。
□①はい □②いいえ
(理由)
7. 今も親にやさしくされたいですか。
□①はい □②いいえ
8. 自分とは違う考え方をしている人に出会ったら
□①無理をして合わせる □②うまく話し合う □③どうしても合わすことができない

3. 結果

3-1 グループで鍋料理を食べるのが好きなものの割合の出生年代依存性

図1に示したように、グループで鍋料理を食べるのが好きなものの割合の出生年代依存性は、1927-39年は72.4%で、1940-49年は79.7%、

1950-59年は低下の傾向を示し71.4%で、1960-69年は77.8%、1970-79年は最多の90.9%と上昇した。1980-89年は低下し77.3%、1990-92年は77.0%、その後1993-95年は上昇の傾向を示し83.7%、1996-98年は81.2%、1999-2003年は82.3%と横ばいの状態であった。

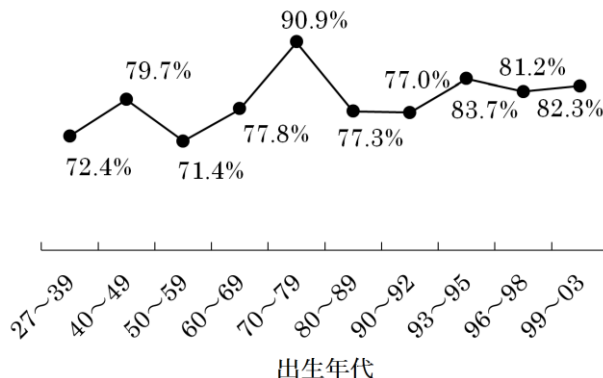


図1 グループで鍋料理を食べるのが好きなものの割合の出生年代依存性 (年代表示では19或いは20を省略)

2011年より2012年にかけて大阪府内にある小・中・高校生・大学生・一般成人に対して大山が調査した。n=1038

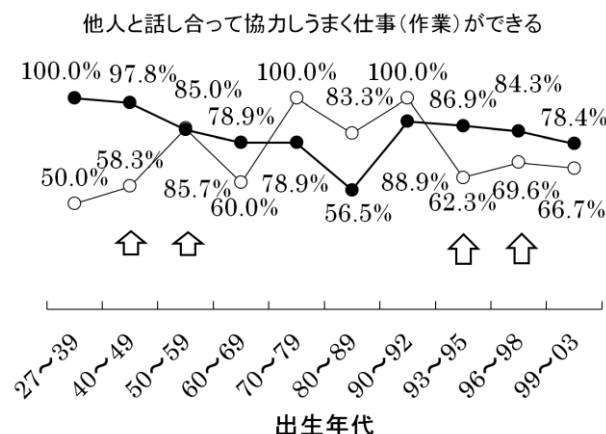


図2 各年代出生者の中の鍋料理が好き(●)と好きではない(○)の中の『他人と話しあうってうまく仕事(作業)ができる』者の割合

2011年から2012年 大阪市内の小・中・高校生・大学生・一般成人に対して大山が調査、n=915
矢印で示した4つの年代では、有意確率0.05で有意差

3-2 「グループで鍋料理を食べるのが好き・好きではない」者の中の「他人と話し合って協力し、うまく仕事(作業)ができる」者の割合の出生年代依存性

図2に示すように「グループで鍋料理を食べるのが好きではない」者の中の「他人と話し合って協力し、うまく仕事(作業)ができる」者の割合は、1999-2003年は66.7%で、1996-98年は69.6%、1993-95年はわずかであるが62.3%と低下の傾向を示し、1990-92年は極めて高く100%であった。1980-89年にかけて低下の傾向を示して83.3%であり、1970-79年は上昇を示し100%となり、1960-69年は極めて低い値を示し60%で、1950-59年は上昇

グループで鍋料理を食べることに関して

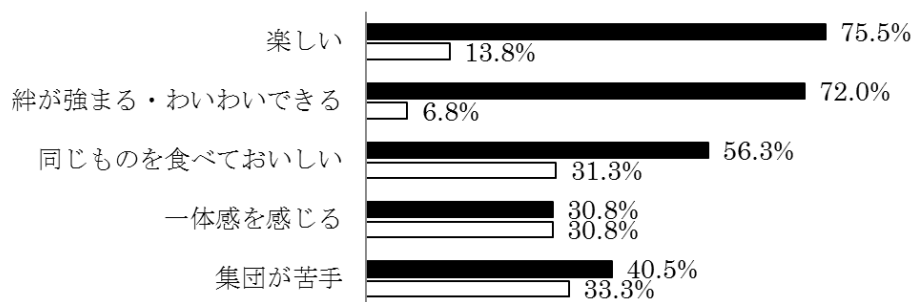


図3 他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる者（■）とできない者（□）の中で、グループで鍋料理を食べる事に関して、各項目を選択したものの割合
2011より2012年にかけて大阪府内にある小・中・高校生・一般成人に対して大山が調査した。
n=444 P<0.05

の傾向を示し85.7%で1940-49年は低下の傾向を示し58.3%で、その後1927-39年では50%の低下の傾向を示した。

2011より2012年にかけて大阪府内にある小・中・高校生・一般成人に対して大山が調査した。n=444 P<0.05 一方、鍋料理が好きなの中の「他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる」者の割合は、1999-2003年は78.4%で、1996-98年は84.3%、1993-95年は86.9%、1990-92年はわずかに上昇の傾向を示し88.9%で、その後低下を示し1980-89年では56.5%で、1970-79年では再び上昇を示し78.9%、1960-69年は78.9%、1950-59年は85.0%で1940-49年は97.8%で、1927-39年では100%と上昇の傾向を示した。

なお、出生年代が、1996-98年、1993-95年、1940-49年及び1927-39年の場合には、「グループで鍋料理を食べるのが好き・好きではない」者の中の「他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる」者の割合に有意差があった(p<0.05)。

3-3「他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる」者のグループの「グループで鍋料理を食べること」好き或いは嫌いの理由

図3に示したように、「他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる」者のグループで鍋料理を食べることの好きな理由の最多は「楽しいから」の75.5%で、次いで「絆が強まる・わいわいできる」の72.0%、「同じものを食べておいしい」の56.3%、最少は「一体感を感じる」の30.8%であった。また、このグループで鍋料理を食べることが好きではない理由として「集団が苦手」の40.5%もあった。「一体感を感じる」以外の項目に関する「他人と話し合って協力し、うまく仕事（作業）ができる」グループと「できない」グループの中での割合に有意差があった(P<0.05)。

3-4「グループで鍋料理を食べるのが好き・好きではない者」と「子供時代の経験」

鍋料理と人間関係に関するアンケートの中で、問い2から5は「子供時代の経験」の経験を尋ねている。これらに対し、肯定的な答えを選択した数（2問選択の場合は①、3問選択の場合は①或いは②を選択した数、0から4まで分布）の割合を「グループで鍋料理を食べるのが好き・好きではない者」のそれぞれに対して図4に示した。

グループで鍋料理を食べるのが好きな者の最多は4個の87.5%で、次いで3個の87.3%、2個の78.3%、1個の68.0%で、0個は33.3%であった。逆に、好きではない者の最大は0個の57.6%で、次いで1個の31.1%、2個野21.0%、3個の12.5%、4個の12.5%であった。

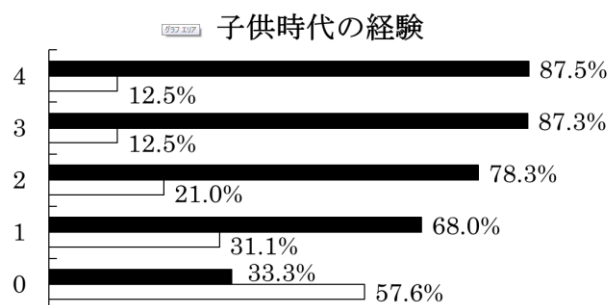


図4 子供時代の経験に関するアンケート調査の2番目から5番目までの問いで①にチェックをつけた数が4から0の者の中で、グループで鍋料理を食べるのが好きな者（■）と好きではない者（□）の割合。
2011より2012年にかけて大阪府内にある小・中・高校生・一般成人に対して大山が調査した。n=1038 P<0.05

3-5「グループで鍋料理を食べるのが好き」な者と「今も親にやさしくされたい」者との関係

図5に示すように、今も親にやさしくされたいものの割合は、グループで鍋料理を食べるのが好きなものが、好きでないものより多かった。逆に、そうは思わないものの割合は、鍋料理を食べるのが好きではない者が好きな者より多かった。両者の関係には有意差があった(P<0.05)。

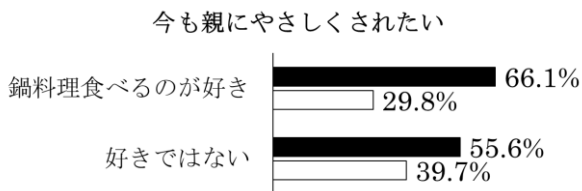


図5 「鍋料理食べるのが好き」な者と「好きではない」者の中で、「今も親にやさしくされたい」者(■)と「そうではない」者(□)の割合。
2011年から2012年 大阪府内の小・中・高校生・大学生・一般成人に対して大山が調査した。n=1036 p<0.05

3-6 「グループで鍋料理を食べるのが好き」な者と「自分と違う考えの人に出会ったら」の関係

図6のごとく、「自分と違う考えの人に出会ったら」場合の対応方法に関して、「グループで鍋料理を食べるのが好きな者」では、最多は「うまく話し合う」で、次いで「無理して合わせる」、最少は「どうしても合わすことができない」であった。一方、グループで鍋料理を食べるのが好きではない者での最多は「うまく話し合う」で、次いで「どうしても合わすことができない」、最少は「無理して合わせる」であった。対応に対する「鍋料理が好きなもの」と「好きでない」グループの中の割合には、有意差があった(P<0.05)。残差分析は行っていない。

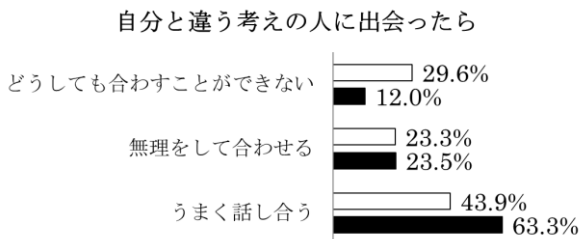


図6 自分と違う考えの人に出会ったらという問いに対して各回答を選択した者の中の「鍋料理が好き」な者(■)と好きではない者(□)の割合。
2011年から2012年 大阪市内の小・中・高校生・大学生・一般成人に対して大山が調査 n=1036

4. 考察

鍋料理が好きな者の人間関係は良好である事が確認された。しかしながら、精神的に自立できていないと推測できる親依存の傾向も表われており、各世代にわたって鍋を囲み、食を共にすることで得られる共感・一体感を求めていることが判明した。日本人の食事は日本の文化的要素とかがわかっていて、食事は子どもの頃から社会性の作法として、規範を継けられてきた。なお食事は生命維持のマズローの1次ニードである生体の生存と安全を図るための1次ニードがあり、それは生存のニードが根底にあった。その上に社会の規範としての社会的承認、集団所属、愛情、支配、服従などがあつた5) 6)。現在の食事の摂取は多様化しており、本調査において、「グループで鍋料理が好き」である者のうち、

「他人と話し合つて協力し、うまく仕事(作業)ができる」もので、「一体感を感じる」から好きと答えたものは30.8%であり、一方、「集団は苦手である」と答えている者は、40.5%と高い値を示していた。しかしながら、「同じものを食べておいしい」と答えた者は56.3%、「絆が強まる」72.0%、「グループで鍋料理を食べることは楽しい」75.5%と高い傾向にあつた。このことは、日本の平安末期及び鎌倉初期から武装集団が「イエ」の制度を作り、そこで機能的な集団である、血縁的、地縁的な集団および村の人間関係に由来する規範を作り、基本的な日常生活を営んできたことが現在にも受け継がれてきたと推測される。

「食育基本法」(平成17年6月)ならびに「食育推進基本計画」(平成18年3月)は、近年の我が国の食をめぐる状況の変化に伴い、現在および将来にわたる健康で文化的な国民の生活と豊かで活力のある社会の実現に寄与することを目的として制定された。その中で、「食育は生きる上での基本」であり、「食」は「豊かな人間性を育み、生きる力を身につけていくために何よりも重要なもの」と位置づけられるとともに、「さまざまな経験を通じて、『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる」とされている7)。

本調査結果においては従来の狭小ではなく、多様性のある考え方と食に対する知識、健全な食生活を実践させることが必要であると考えられる。

参考文献

- [1] 奥村彪生「ふるさとの伝承料理5」農文協 2006年3月
- [2] 石毛直道「ニッポンの食卓」平凡社 2006年3月
- [3] 北岡正三郎「物語 食の文化 美味しい話、味な知識」中公新書 2011年6月；p 252-253
- [4] 北俊夫「食育」明治図書 2008年10月
- [5] 日本保健医療行動科学会「保健医療行動科学事典」メヂカルフレンド、1999年9月
- [6] 八木 透「こんなに面白い民俗学」ナツメ出版企画株式会社 2004年3月
- [7] 「学校保健の動向 H24 年度版」日本学校保健会 2012年11月；p 121